

## 常呂川水系河川整備計画に関する意見書

### ◎常呂川との関わり（補足）

私は1954年（昭和29年）訓子府町仲町に生まれ、1961年頃から1966年まで（昭和36年から41年まで）すなわち小学1年生から6年生にかけて常呂川を遊び場として、昆虫採集、魚採り、水泳、木登り、ぶどう採り等、その自然に深く親しんで育ちました。

その後訓子府町を離れ各地を転々としましたが、1995年に帰郷し、以降現在地に暮らしております。

帰郷してもっとも残念だったのは、常呂川水系が変わり果てていたことです。常呂川水系の生物相は昭和30年代に比べて極端に貧しくなっており、非常に心を痛めております。

### ◎意見

私の意見の骨子は、常呂川水系の河川と河川敷の生物多様性を、せめて昭和40年頃の状態に回復していただきたいということです。

#### 1. 昭和40年頃の常呂川水系の状態

別紙2～7に、私が [redacted] 執筆した作品（童話）を6篇添付しました。この中で、訓子府町はネップルタウン、常呂川はコロト川、シルコマベツ川は東ネップル川、田島牧場はヌマノ牧場と呼び変え、登場人物は変名にしておりますが、内容は昭和39年から41年にかけて（私が小学4年生から6年生のときに）実際に体験した事実に基づいて書かれております。

また、別紙8にはその当時に私たちが採集した昆虫標本目録を添付しました。

当時の私たちの活動範囲は、叶橋を基点として小学3年生が半日で歩いて行って帰れる範囲（およそ半径2Km以内）が主で、まれに自転車で往復1日（およそ半径4Km）の範囲でありました。

添付の作品および目録を読んでもいただければ、そのような近距離のエリア内に極めて豊かな生態系があつて、濃密な自然とのふれあいがあつたことをご理解いただけるかと存じます。

## 2. 現在の常呂川水系の状態

1995年以降の状態については、時折上述の範囲を歩いた程度の知見ですが、気のついた点をいくつか断片的に挙げます。

### ①河川に魚がほとんどいなくなった。

●川に蛇行が無く、岸が全てコンクリートで覆われたためである。

### ②叶橋～穂波橋間の北岸の河川敷はかなり昔の面影を残しているが、乾燥化が進んでいるため湿性生物がほとんど残っていない。

●いくつかあった沼が壊滅している。

○トンボ、ヤチウグイ、カエルなどが絶滅した。

○かつてキショウブが繁茂していた沼の跡地の窪みに現在3株しか残っていない。

●叶橋付近の樋門にセリが1株だけ残っている。それを食草とするキアゲハの幼虫を1頭確認したが、1頭では子孫は残せない。

●その近くの常呂川河岸にガマが3株だけ残っている。

●ヨシは全域に渡ってあるがその数は激減した。

○ガマやヨシなどの湿生植物は水質浄化に欠かせない。

●フキ、ミツバ、ヨモギは最も身近で豊富な山菜であったが、激減していて採るに忍びない。

●ヤマブドウが絶滅し、そのニッチにツルウメモドキが繁茂して生態系を変えている。

●大麻が除去され、そのニッチにルーサンが入り込んでいる。

○これは繁殖力が旺盛なので生態系を激変させる恐れがある。

●砂の岸辺が無くなったのでムシトリナデシコが絶滅している。

●乾燥化しているにもかかわらず砂溜りが無くなっていてウスバカゲロウの幼虫（蟻地獄）が絶滅している。

●樹液を出しているナラが20本ほど残っている。

○クワガタ等の確認は行っていないが期待できる。

●キイチゴは昔と同じぐらいある。

●コンロンソウもかなりあるが、ハタザオは2箇所数株あるだけである。

○外来種のおオモンシロチョウが優勢になっているので、在来種のモンシロチョウの保護のためにこれら野生のアブラナ科植物の保全が必要である。スジグロシロチョウ、エゾスジグロシロチョウ、ツマキチョウなどのためにも必要である。

●ヒゴグサもかなりあり、それを食草とするオオヒカゲがいる。

●ホザキナナカマドが増えており、ルリシジミは増えている。

- ③ 叶橋～西富樋門間の北岸の河川敷は乾燥が進み昔の面影がまったく無い。
- 訓子府大橋の上手30m程のところにイタドリの小群落がある。この付近は現在湿地だが、ブルドーザーで柳類を根こそぎ剥いでしまったので、いずれまったくの乾燥地となり、イタドリは壊滅するであろう。
  - 西富樋門手前100m程のところにホザキシモツケの小群落がある。これは2種のチョウの食草となるので増えて欲しい。
  - 西富樋門の上手にエゾヤマハギの大群落がある。
    - 昔はまったく無かったが樋門工事の際に進出したのでであろう。5種のチョウの食草となるのでこれは許そう。
    - その上手に柳の大群落があるが、乾燥が進むと遷移するだろう。
- ④ 常呂川南岸には昔は堤防が無く広大な湿地帯となっていて多様な生物が棲息したが、今はパークゴルフ場やお祭り広場になっていて生態系は壊滅した。
- シルコマベツ川の注ぐ辺りはかなり植生があるが詳しくは確認していない。上流域(道有林内)の生態系はまだ豊富である。
  - ケトナイ川の中流域および合流点付近は見る影も無い。上流域については詳しく調べていない。
- ⑤ 訓子府川(中ノ沢～北栄間)は、常呂川流域とは異なる独特の豊かな生態系を持っていたが、今は見る影もない。
- かつて採集したホンサナエ、ミヤマカワトンボ、エゾコヤマトンボ、オオヤマトンボは常呂川流域では決して見られない種であった。詳しく調べていないが多分今は絶滅したであろう。
- ⑥ 紅葉川もまた独特な生態系を持っていたし、酒谷川にはイトヨがいたが、これらも壊滅した。
- ⑦ 訓子府神社の境界に沿って流れている小川は、昔は叶橋～穂波橋間の北岸と同じような生態系があった。それを水源としていた訓子府小学校の二つの池とともに、小学低学年の児童はまずそこで水辺遊びを習得して、当時「大川」と呼ばれていた常呂川での本格的な川遊びに備えたのであった。
- しかしこの小川の生態系は、昭和42年に上流に建てられたバレイショ加工工場の廃液垂れ流しによってヘドロ化し壊滅した。
- まだ公害規正法が無かったとはいえ、川を綺麗にする代わりにコンクリートで蓋をし、腐臭を放つ池を埋め立ててしまった訓子府町議会の不見識が悔やまれてならない。

### 3. 提言

#### (1) 訓子府市街地付近（叶橋を基点とする上下2 Km）の常呂川流域について

- ① 常呂川に適度な蛇行を与える。
- ② 砂利の河岸、砂の河岸、植物の根の河岸、蛇籠の河岸などを少なくともそれぞれ20 m規模で多数造成する。  
現在の叶橋付近は砂利の河岸の外側にコンクリートによる護岸を施してあるが、そのような工法がよいか、あるいは現存のコンクリート護岸の外側に細流を導きそこに上記の河岸を造成するか、それはあなた方の専門的な判断にお任せする。  
(ドジョウ、カジカの繁殖をもって事業達成度を評価する。)
- ③ 叶橋～訓子府大橋間およびケトナイ川注ぎ口付近に「わんど」を多数造成する。その周囲は半日陰の湿性生態系とする。  
(エゾウグイの繁殖をもって評価する。)
- ④ 叶橋～穂波橋間の北岸に池沼を復元し、日陰の湿性生態系を回復させる。  
○ 5～10 a 水深20～30 cm程度の池沼を数箇所作る。  
(キバネモリトンボ、ヤチウグイの繁殖をもって評価する。)
- ⑤ 訓子府大橋上流の北岸200 m程度を、明るい湿性生態系に造成する。  
○ 50 a 最大水深80 cm程度の広く深い池を1～2箇所設け、常に明るい開放水面を維持する。  
(オオルリボシヤンマの繁殖をもって評価する。)
- ⑥ その上流の河川敷は乾性生態系とする。  
○ 当面は現状を放任し自然の遷移に任せてよいが、将来は野焼きが必要となるであろう。
- ⑦ シルコマベツ川の注ぎ口付近にも「わんど」を造成し、その周囲は半日陰の湿性生態系とする。  
(ここもエゾウグイの繁殖をもって評価する。)
- ⑧ 必要に応じてかつて棲息していた生物種に限り移植・放流する。  
(くれぐれも外来種を移入させないこと。)
- ⑨ 川遊び教室を開催する。  
○ 当面現在53歳以上の川遊び経験者を指導員とし、徐々に子供たちの上級生が下級生を指導する子供文化の復活を図る。
- ⑩ パトロール体制を構築する。  
○ 主にシルバー人材を活用する。

⑪上の⑨⑩を担う人々の研修体制を構築する。

⑫流域のカラマツ林を雑木林に変える。

○カラマツ林の二酸化炭素吸収量は雑木林の1/3～1/5しかない。しかも木材としての利用価値もまったくない。薪として利用するにも搬出にかかる石油燃料の消費量のほうが多くなるであろう。林床には草一本生えず生物相は極めて貧弱で、しかも保水力が低く豪雨災害を引き起こしやすい。

○カラマツを伐採搬出することは費用がかかりすぎるし徒に石油資源を消費するだけであるから、山焼きをするのが最善である。一時的には二酸化炭素を放出するが長期的に見れば二酸化炭素の吸収量を高めることが出来る。

山焼きは京都の大文字焼きのように観光資源となる。

○山焼きした跡地は放任してもやがて雑木林になるが、短期間で雑木林化するためには既存の雑木林から種子を採取し育苗して移植するほうが望ましい。

このような事業は四国の四万十川流域のように障害者施設に委託して行くと業者に委託するよりも安価に実施できるし、障害者の福祉向上にも役立つ。

○雑木林の維持には手入れが欠かせないので補助金を与える。

⑬以上の成果を都市住民に向け発信し「川とのふれあいツアー」等を企画推進する。

○連動して旅館や公共宿泊施設、食堂、昆虫採集用具・魚採り用具等の販売店などを充実させる。

⑭都市住民ならではの川遊びの発想（カヌー、ラフティング等）を逆輸入し、川とのふれあいのヴァリエーションを増やす。

⑮常呂川流域ならではの特産品の販売をこれと連動させる。

○訓子府町の場合、現状は玉葱、メロン、地酒「妻恋橋」「常呂川」ぐらいだが、雑木林が育成されると山野草がこれに加わる。

オホーツク地方の普通種は本州の希少種であるから、珍しい高級茶花としての潜在的需要は相当大きいと思われる。

## （2）置戸町、北見市の流域について

①置戸町流域については昔も今もあまり知らないので提言を控える。

②北見市については、昨年の大規模断水の原因は、上水道取水地点での河岸の土砂の流出によるものと聞いている。

また中下流域で浸食された土砂は海に流出し水産業に多大な害を

及ぼしているとも聞くし、流域農家の家畜糞尿や農地へ散布された農薬も常呂川およびオホーツク海を汚染していると聞く。

これらを改善するには次のような施策が必要であろう。

○できるなら河岸の耕作権を放棄してもらい、河畔に湿原を復元する。(ヨシなどの湿生植物による河川の浄化法は10年ほど前に北見工業大学がノウハウを確立している。)

該当農家に対してはある程度の補償金を支払う必要があるだろう。

○そのような支出が許されないなら、河川敷に大々的に水田を造成するのがよい。むろん飼料作物として栽培するのである。水稻の飼料価値は穂孕み期に刈れば牧草に勝る。キャタピラ式ロールペーラーで収穫しビニール梱包サイレージとする。等高線に沿って畔を作り不耕起・直播・無農薬・無肥料栽培とし、飛行機で種籾を播くとよい。(この栽培法はやはり10年ほど前に上川農業試験場がノウハウを確立している。)

平均的な水田の湛水能力は200mmの雨量を蓄えることが出来るので、昔は豪雨が急激に河川に流入するのを緩和していた。(畦の高さ×面積で湛水能力は決まる。畦の強度は幅に比例する。そういう計算はあなた方の専門分野であろう。)

またその水田にヒメモノアラガイやカワニナを放流すればヘイケボタルが繁殖でき観光資源となる。ヤチウグイやドジョウやタニシを放流すれば水鳥が繁殖しこれも観光資源となる。

③北見市の常呂川流域には以上の施策を行うことがまず急務であるが、その後は(1)で述べたと同様な施策を、置戸町、訓子府町、北見市全域に及ぼし、連携させるべきである。

そうすれば、常呂川水系全域に農林水と観光がミックスした持続性の高い産業圏と、環境と人に優しいオリジナリティの高い文化圏が形成されるであろう。

**結語：**このような事業展開は、従来の工学的発想の河川施策には全く無かったものですから、自然科学と人文科学とにまたがる学際的な協力が必要ですし、費用もかかるに違いありませんが、環境問題に対する人々の関心が高まっている今、流域住民ばかりではなく道民・国民さらには世界中の人々に広く支持されるでありましょう。

そして、道および国は部や省の横断的連携が必要となりますが、知事や首相、道議会や国会の承認が必ず得られるものと信じます。ぜひ前向きにご検討ください。 以上